

音声ペンを活用して意思の表出を促す授業を目指して

「みんなでゲームをしよう！」～絵合わせカルタゲーム～

○杉田葉子 本間貴子 佐藤知洋 根本文雄 生田茂

(筑波大学附属大塚特別支援学校) (大妻女子大学社会情報学部)

キーワード：知的障害 教材・教具 意思の表出

(目的)

障害者差別解消法が2016年4月から施行され、障害の有無に関わらず一人一人の人格や個性を尊重しながら共生社会の実現に向けて大きく社会が動き出した。知的障害児がより良く社会参加をしていくためには、一人一人の障害の特性や程度を配慮しつつ、様々なことに興味や関心を広げ、好きなことややりたいことを見つけ、自ら選んだり伝えたりする力が更に必要になってくると思われる。本研究では、絵合わせカルタゲームを通して、意思の表出を促し、意思の表明の基盤となる力を育むための授業作りを目的とした。

(方法)

対象は、知的障害特別支援学校小学部3年男子2名・女子2名、小学部4年男子3名・女子1名の8名。平成28年5月から平成29年2月までの期間。対象児童の所属学級における「生活」授業にて月に1～4時間程度実施した。児童の障害種は様々であり、日常生活の着替えや食事等、ほぼ自立している生徒から部分的な支援があれば行える児童までがいる。コミュニケーション面も簡単な指示を理解して、返答したり行動に移したりすることができる児童から、発声はあるものの指示理解が難しいため、絵カードや視覚的支援を手がかりとして行動に移すことができたり、気持ちを伝えたりしている児童が在籍している。

ゲーム活動は、学級の児童を2チームに分け、児童の実態や課題に応じて役割を設定し、シルエットの絵カードを見て、音楽の流れている間に手元の絵カードから同じ生き物カードを見つけて発表し、答え合わせを自分で行うようにした。第一期は、動物園、第二期は水族館、第三期は動物園と水族館を合わせたカードを使用してゲームを実施した。取り札カードの生き物の名称が分からない場合やクイズの答え合わせに音声ペンを活用することとした。各チーム1名ずつが順番に前に出て、それぞれのチームに異なるシルエットクイズを出題し、取り札の絵カードもチーム毎に2セット用意した。また、活動の評価として、積極的な友達との関わりや、より良い活動の仕方に対して、「はなまるポイント」を提示して視覚的に評価を行った。

仮説として、コミュニケーション能力に差がある学級集団においても教材・教具を工夫し、クイズのヒントや発表時のツールとして、音声ペンを活用することで、安心して課題に取り組むことができ、結果として意思の表出を促すことが期待されるのではないかと考えた。

授業をVTR撮影し、ビデオ分析を通して教材・教具の工夫など人的環境、物理的環境の改善及び評価ツールの検討を行った。さらに事例対象児童が家庭学習で実施している作文から内容を分析した。また、定期的に学部教員や大学教員と意見交換を行った。

(結果)

絵合わせカルタゲームの活動を通して、役割意識の向上、カードを見比べて選択する力、音声ペン等の支援ツールを特定の児童だけでなく学級共通の支援ツールとして、児童の実態に応じて活用したことで、一人一人の参加機会や学習への取り組み方に変容が見られた。

事例として取り上げる児童Aは、自閉症傾向の児童である。日頃から人前での発表場面で緊張が強く、自ら挙手して発言することが少ない。Table.1は、各期2時間ずつの

発表場面の変容を示したものである。

Table.1 A児 クイズ発表場面の変容

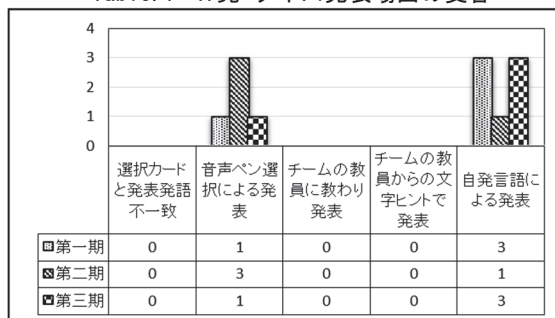


Table.2 A児 作文の文字数と主な品詞活用の変化

	6/29(第一期)	9/9(第二期)	2/3(第三期)
文字数	27	96	153
名詞	4	14	25
動詞	2	4	10
形容詞	0	0	2

第二期で、新たなテーマによるゲーム活動が展開された場面では、音声ペンのツールを手掛かりに発表し、第三期には自発言語による発表が増加した。また、家庭学習の作文の文字数と主な品詞の活用にもそれぞれ増加が見られた(Table.2)。

(考察)

以上、言語表出の無い児童や集団場面で緊張感が高い児童等、様々な実態を持つ学級集団において、絵合わせカルタゲームに取り組み、一人1役の役割活動や音声ペンを活用したことで、一人一人の活躍の場が生まれ、クイズの回答に困った状況でも安心して活動に取り組むことができた。また、活動の評価として「はなまるポイント」を視覚的に提示したことで、児童自身がより良い学習参加の仕方や友達との関わり方について知る機会となった。その都度、評価をされることで自信や自己肯定感が育ち、結果として、意思の表出を促すことへつながるものと思われる。このことは、障害の有無に関わらず、授業作りや児童同士の仲間関係を育む上で、学習機会の設定や方法、教材・教具の工夫、提示方法等が重要であると考えられる。

(結論)

知的障害者の障害の程度に関わらず、学習機会の設定や方法、ICT等の教材・教具の工夫をすることで、コミュニケーションスキルを高め、日々の生活場面においても意思が尊重される環境構築の一助となるであろう。

(附記)

本発表にあたっては保護者の許可を得ている。本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)(16K04844)及び大妻女子大学戦略的個人研究費(S2810)(代表：大妻女子大学 生田茂)の助成を受けて行った研究成果の一部である。

(文献)

- 1) 「特別支援教育のとおき授業レシピ」監修：藤原義博、柘植雅義 編著：筑波大学附属大塚特別支援学校(2015)
- 2) 筑波大学附属大塚特別支援学校小学部研究紀要(2017)(SUGITA Yoko, HOMMA Takako, SATO Tomohiro, NEMOTO Fumio, IKUTA Shigeru)